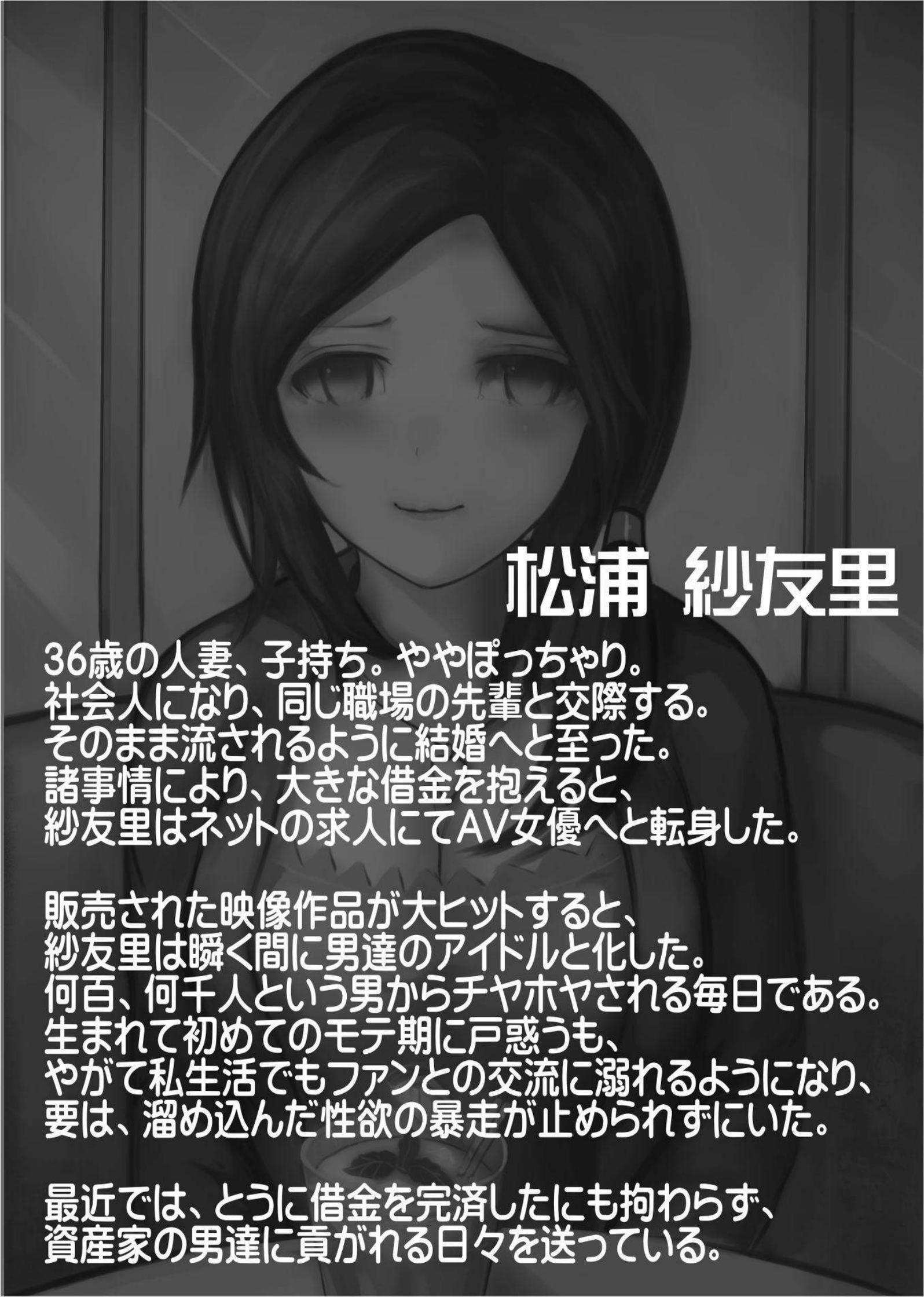




人妻AVデビュー2

一人の夫と、大勢の彼氏、愛する息子たち

原作 ももえもじ



松浦 紗友里

36歳の人妻、子持ち。ややぽっちゃり。
社会人になり、同じ職場の先輩と交際する。
そのまま流されるように結婚へと至った。
諸事情により、大きな借金を抱えると、
紗友里はネットの求人にてAV女優へと転身した。

販売された映像作品が大ヒットすると、
紗友里は瞬く間に男達のアイドルと化した。
何百、何千人という男からチヤホヤされる毎日である。
生まれて初めてのモテ期に戸惑うも、
やがて私生活でもファンとの交流に溺れるようになり、
要は、溜め込んだ性欲の暴走が止められずにいた。

最近では、とうに借金を完済したにも拘わらず、
資産家の男達に貢がれる日々を送っている。

あらすじ

松浦 紗友里（まつうら さゆり）

子持ちの人妻でありながら、裏で多額の借金を抱えていた。

借金の事実を夫にも打ち明けられず、一人で苦しんでいた際に見つけた求人がインディーズのAV女優である。AV会社による撮影ではなく、飽くまで個人の撮影であり、不安になりながらも紗友里は迷走の果てに応募した。

……撮影は大成功だった。

作品が空前絶後のヒットに達すると、紗友里は瞬く間にアンダーグラウンドの姫として狂い咲く。突出した美人でなければ、36歳の人妻らしいぽっちゃりの紗友里であるも、その凡な潜在性が無量の男を魅了したのだった。

それは、まるで邪悪な性の神に呪われたように……

経験の無い童貞も、生業としたAV男優さえも、紗友里を渴望するに至った。

モテ期というには、あまりに大規模なハーレムだろう。ファンとのセックスを企画とした感謝祭では、紗友里との交配を熱望した輩が何十人と集まり、一人の女を巡って争う乱痴気祭りが勃発した。

36歳の人妻から放たれる魔的な魅力には、女性の経験が豊富な遊び人さえも一途にさせるチカラがあり、誰彼が紗友里へと依存したのだ。

紗友里もまた、全身で味わう男達の愛情に絆されては、脳裏でチラついていた旦那の存在を蚊帳の外へと放り、【性】へと骨を埋めてしまう。大勢に愛される快感に、どっぶり溺れた瞬間だった。

それからの紗友里は、家庭を持つ身でありながら、遅咲きの性欲から抗えずに、男達からの誘いを断れなくなり、或いは嬉々として受け入れていた。目先の愛に没頭する紗友里は、やがて私生活でも見境なく数多の男性と関係を深めるようになるのだった。

何百、何千、何万人という男に愛される幸せが紗友里を変えたのだ。

なお、紗友里は借金を既に完済している。膨大な数のファンを囲う紗友里には、大金を貢ぐ輩が多く存在する。最初こそ遠慮していた紗友里も、いつしか金銭を受け取るようになり、いまでは一晩の乱交パーティーで旦那の年収を遥かに凌ぐ金額を手にしていた。

『紗友里さん!! 今日K9グループとL1グループの合同ですよね!』
『やっとLグループだよ!! 紗友里ちゃん待たせすぎ!!』

「K9とL1と……それからL2とL3のグループも一緒ですよ」

『え、えっ!? 今日は4グループの合同なんですか!』
『らしいな。ちゃんと俺の番が回ってくるか心配だわ』
『俺のことも相手にしてくれよな? 紗友里?』

「ふふっ、ちゃんとみんな相手にするから大丈夫ですよ♪」

『いやいや4グループじゃ全員に回ってこないでしょ。百人近くいるじゃん』
『そもそも、紗友里ちゃんの身体は大丈夫なの？』

「大丈夫。一昨日は6グループと合同だったから……」

『凄すぎ』

『あー、早くやりてえ。もうそっち行って良い？』

「ええっ!? まだダメだよー!! さっきK8グループが終わって帰ってきた
ばっかりなんだから!!」

『無理。待てない。いまから紗友里ん家に凸する』

『マジかよ。俺も行くわ。仕事抜け出してくる』

『おい、抜け駆けは規則違反だろうが!!』

『じゃあ、お前は時間通りに来れば良い』

『ふざけんな。俺も行くぞ』

「ええーっ!? 何人で来るつもりなの!? 夫が帰ってくるかもしれないじゃん!! 私の家はダメーっ!!」

SNSではファンがグループ化されており、紗友里は平等かつ順番に男性陣の相手をしている。毎晩と大きなラブホテルを借りては、全員と行為が終わるまで宴は終わらない。

トラブルを避ける為に、コミュニティで規則を設けてはいるものの、最近では殆ど意味を成していない。今日も、規則を破った男達が紗友里の家へと赴こうとしていた。

「ダメったらダメっ!! もう夕方だもん。いつ夫が帰ってきてもおかしくないの。昼間だったら考えたけど、いまは絶対ダメ。約束を破ったら、絶交だからね!!」

未だ人妻の紗友里が戸惑いのレスポンスを送るも、その表情は紅く蕩けていた。そして今夜も、男達の愛情を一身に受け止める……



第一話 四十路記念ツアー
【前半】

一 はじまり

学生時代の恋愛経験はゼロと言って良い。

一度だけ同級生に告白されたことはあるけど、後で知った話だと、その男子は私以外のクラスの女子全員にも告白していたらしい。

初めてのモテ期だと期待していただけに、私は結構なショックを受けた。

だから、初めての恋愛は大人になってからだ。

同じ職場の先輩が積極的にアプローチをしてきたのである。

いまなら分かる。夫は、いわゆるモテないタイプだったのだ。

妻の私が言うのも何だけど……

私のことを、「もっとモテない人間」だと思ったのだろう。

結婚に焦っていたこともあり、内向的な性格でありながら、彼は飲み会などのチャンスが訪れると、いつも終盤辺りで私の席へと来ては、必死で口説いてきた。

私と同じくらい異性経験が無い彼の、あまりに拙い口説き文句は、赤面必至な恥ずかしい言葉の羅列だった。

それでも、当時の私は嬉しかったのかもしれない。

だって最終的には、結婚にまで行き着いてしまったのだから。

……結婚したからには、誠意を尽くさなければならぬ。

例え、夫のことを真に愛していなかったとしても……

結婚とは、それ程までに重要な責務なのだ。

結婚したからには、その絆を蔑ろにしてはいけない。

そう思いつつも踏みにじるのが世の常と言えば、それまでだろう……

ただ、私の場合は度が過ぎていた。

ずっと鳴り止まないメッセージの受信音や、顔から足の裏側までキスマークに染まり切った真っ赤な全身、どれだけ洗濯しても仄かに臭い立つ私服の数々……

これが現在の私なのだ。

スマホを開く。連絡先には、数え切れない男の名前が並んでいる。

少し前までは家族と夫と、それから数少ない友人しか登録されてなかったのに。

A V出演で前代未聞の大人気を博したらしい私は、一夜にして何人という男性ファンを獲得したようだ。

こんな若くも綺麗でも無い私に需要があるとは、いまも信じられないけど……世の中は不思議である。

私をデビューさせた男性は、ファンとの交流を大切にすらしく、企画として「感謝祭」という名の乱交パーティーを頻繁に開催していた。

そのファンの数が尋常ではなく、一晩で何十人という男性を相手にさせられる。多い時には、百を超える人数が集まっていた。

感謝祭の度に連絡先を交換していたものだから、いつの間にか連絡先も千人を超える始末だ。

個別では、とても対応が間に合わず……すぐさまグループ形式を執ったものの、そうしたグループすらも、現在では無数に存在していた。

どうして私なんだろうか？

大人になって多少は色気づいてきたかもしれないけど、私なんかより可愛くて若くて綺麗な人は、いくらでもいるハズなのに……

ファンの中には、家や車を買ってくれたり、本気でプロポーズしてくれた者もいた。資産家や若くて格好良い青年まで多く居たりするので謎は深まるばかりだ。

この夢のようなモテ期が終わったら、私は次こそ夫だけを愛そうと思っていた。数え切れない男の人と不倫だなんて……息子にとっても偉い迷惑だろう。こんな夢のようなモテ期だけど、いつか終わりは必ず来る筈だ。私だって歳を取るし、そのぶん鮮度も失われていく。性的魅力は減退の一途だ。だから、いつかは私を支持する人も居なくなるだろう……少しずつ減っていき、やがては煙のように消えていくのだ……そう思っていた。

しかし、デビューから数年が経過した現在でも、状況に変わりは無かった。

四十路。なのに、未だに男性陣は私を愛してくれている。

寧ろ、状況はエスカレートしていた。

ファンクラブの規模は、雪だるまのように膨らみ続けており、今日もファンが新たなファンを生み出している。通話で私の声を聞きながら、オナニーに馳せてくれている。何個目かも分からないファンクラブに加入してくれては、感謝祭の順番待ちを素直に受け入れてくれていた。

ピークは、未だ迎えては居なかつたのだった。

二 バスから溢れる男の臭い

『紗友里ちゃんの四十歳記念パーティーをやるう』

それは、ファンの中でも特に私へと傾倒する者の発案だった。

久志さん^{ひさし}という実業家であり、私や夫よりも遥かに年上の壮年だ。

間もなく六十歳を迎える身ながら、未だ色事はバリバリの現役と言い、私とのエッチでは、獣のような獰猛っぷりで何度も愛してくれる存在だった。

きつと若い頃はイケメンで……色んな女性を泣かせてきたんだろうと思わせる風貌である。社会的に成功しており、容姿・地位・資産の全てを兼ね揃えた正に完璧な人と言えた。

そんな立派な人が、どうして私なんか依存しているのかは分からない。

久志さんくらいの立場なら、私のような地下AV女優なんかではなく、本物の女優、或いは現役アイドルやモデルすらも容易くモノに出来るだろうに……話を聞くと、「自分でも分からない。好き過ぎて仕方がないんだ」と返された。

そんな彼の主催する記念パーティーが盛大でないはずが無い。

四十の誕生日を迎えた私は、夫を余所に、久志さんから言われた場所へと赴く。待ち合わせ場所は、郊外にある無駄に広い駐車場だった。

行くとそこには、大きなバスが一つだけポツンと停まっていた。

全面がマジックミラーとなっており、一目で久志さんによる手配だと分かる。

私は、目的地が何処かも知らされていない。

サプライズということ、バスでの移動ということすら教えて貰わなかった。

私専用のリムジンな訳がない。そのバスの構えを見ただけで心が騒がしくなる。

昨日の夜に乱交したばかりだというのに、早速と全身の体温が上昇する。

昨夜だけでも嫌という程に体液を撒き散らしたのに、また秘部の湿りを感じる。

(あれ絶対いっぱい人が乗ってるよ……)

辺りは木々で囲まれた、ひと気のない静かな駐車場だ。

バスからも、特になにかしらの音が漏れているということはない。

バスに誰も乗っていない……という訳では無く、きつと防音が完璧なのだ。

(……………つ)

邪な妄想が全身に駆け巡り、歩く足が自然と速くなってしまふ。

歩いて近づく私に久志さんが気付くと、少年のように駆け足で近付いてきた。

「やあ、紗友里ちゃん。誕生日おめでとう!!」

「ありがとうございます。久志さん」

「早速だけど、バスに乗ってよ」

会うなりすぐに久志さんは、私に密着して肩を抱き寄せてきた。

横に並んで腰に腕を回しては、いきなり私の胸を捉えてくる。

そのまま歩きながら、久志さんが何度も口付けをくれた。

加齢臭に気を遣っているのだろう。爽やかな香りが鼻を掠めていた。

挨拶のキスを済ませると、二人三脚のような形でバスに歩き出す。早くバスに

案内したい気持ちがありながら、すっかりスキンシップを欠かさない久志さんに

心が躍る。肌寒い日なのに、とうに身体からは汗が滴り始めていた。

荒々しくも優しさを感ぜられるキス……

その余韻を堪能する間もなく、私達はすぐにバス乗り場へと到着する。

観光用と思える大型のバスである。きつと五十人は乗れるだろうサイズだった。

「ごくっ……」

思わず喉が鳴る。心も騒がしい。もし、あのバスにそれだけの人数が居て……

その全員とエッチすることになったら、と思うと息が荒くなる。

そんな私を見た久志さんが笑った。

「もう既に、なにが起こるか分かってる感じだね」

「そ、そんなこと無いですよっ」

「身体も火照ってるじゃないか。待ち切れなかったのだろうか？」

「え、そ、そんな……」

「良いことじゃないか。今日は、いままでにない盛大なお祝いになるんだから」

「い、いままでにない……!?」

「勿論だよ。紗友里ちゃんの四十歳の誕生日だよ？ やはり、いつも通りという訳には行かないだろう。実は、紗友里ちゃんに内緒で前々から計画していたのさ。四十歳の誕生日をお祝いする為に……」

いままでにない……という言葉だけで下半身がジワリと熱くなった気がした。

久志さんの言う通り、とつくに私の準備は整っていたのだ。

「おめでとう〜!!」

「おめでとう紗友里ちゃん!!」

「紗友里い〜!!」

「待ってましたっ!!」

「紗友里さんと週末旅行……夢みたいだっ!!」

「わっ、す、凄いつ……こんなに大人数とっ!!」

私がバス前に立つと、扉が自動的に開き出す。

中に入っていくと、そこには予想通り、バスにはぎっしりと人で溢れていた。高級感のある椅子が並び、一人ひとりが縦横に規則正しく並んでいる。

静かに腰を下ろしていた様子から一転……私の姿を確認するや否や、男性陣のテンションが大爆発である。待つてましたと言わんばかりの……興奮した様子を隠さないスタンディングオベーションだ。

乗客の年齢層は、実にまちまちだった。

若者が大半を占めているものの、久志さんのように六十歳近くの方も多く居る。白髪だらけのオジサンから、ぱつと見では●学生のような童顔まで様々だ。

共通点と言えば、全員が男性ということ。当然ながら、女は私一人だけだった。見知った顔が殆どだけど、中には知らない顔もある。

いまでは毎日のように新規のファンが増えていくに、珍しいことではない。未だに伸び続けている私の出演した動画……加えて、人づての招待が多い。

今日も、新規のファンが生まれたようだ。

そして、そんな面々と週末ずっと一緒に過ごすという……

見た感じ、本当に五十人くらい居そうだ。

いまとなつては、五十人の異性と連日エッチも、珍しいことではない。

先週なんか五つのファンクラブと合同でエッチした。

百人は居たはずだ。

それに比べれば、まだ五十人は良識の「範疇」なのだ。

だけど、なんだろう……今回はこれだけじゃない気がする。

不安と期待が入り交じる。

本当は「不安」なんて無いのかもしれないけど、こういう性分なのだ。

『有り得ない人数で私を滅茶苦茶にしてほしい』という本音を隠す為に……

「いやあ、もう紗友里ちゃんも四十歳かあ。でも全然若くて綺麗だよね」

「あ、ありがとうございますっ!!」

「というか増々美人になってる気がする」

「早く触りてえく!!」

「じゃあ、紗友里ちゃん。中央の補助席に座って貰える？」

「は、はい……」

バスは四列シートであり、二列目と三列目の間が通路となっている。

通路の丁度中心にだけ補助席が一つ出ている。

そこに座れということだろう。

私は、高鳴る鼓動を必死に抑えながら、その乗客の渦中へと進むのだった。

三 バスの中で女一人

「失礼します……」

バスが動き出すと、私は促されるままに補助席へと座る。

丁度バスの中央にあり、そこだけ切り取られたように、ポツンと補助席が出ている。それは、まるで虫籠の真ん中にぶら下げたエサにも見えた。

一歩ずつ私が補助席までの通路を歩く。

全身に浴びせられる視線も、ずっと付き纏い続けていた。

観光用の大型バスが見事に満席だ。恐らく五十人は居るハズである。

百の目が私を捉えている。

こんな、なんでもない一人の女を、みんなが視てくる。

こんな、なんでもない私の為に、全員が集まっているのだ。

チクチクと、こそばゆい感覚。舐められるように、ねっとりした視線だった。全身を炙られる視線には未だ慣れない。

一人の異性と目を合わせることにすら、少し前までは出来なかったのだから……
こんな大勢に視られたら、いまでも紅潮を抑えられない。

経験人数が五桁に達しても、赤面症は現在でも付き纏っていた。

腰を下ろした私に、鼻息を荒くした男性が前後左右から忍び寄ってくる。

愛おしいものを見るような目で私を撫でると、各々ゆっくり手を伸ばしてきた。
触られるっ………その瞬間が私は大好きだった。

「あっ……」

右手を取られる。見ると、私より遥かに若い男子が手を繋いできた。

反射的に私は、恋人のような情熱的な貝殻繋ぎをしてしまう。

男子は、あまり女性に慣れていないようであり、それだけで顔を赤くしていた。

最近では珍しいウブな反応を前に、思わず私もキュンとしてしまう。

「お名前、聞いても良い？」

「あ、あの、俺……中江芳樹と言います……」

「会うの初めてだよね？」

「は、はい。前から動画で紗友里さんに憧れて……ファンクラブも入ってます。

三年前から入ってます!! でも、恥ずかしくて中々来れなくて……やっと、今日
来れました!!」

「誕生日に来てくれるなんてロマンチック。ありがとう」

「は、はい!!」

芳樹という男の子は、顔を真っ赤にしたまま、終始俯きつ放しだった。

それでも私と話せたのが嬉しかったのか、俯きながらも鼻息を荒くして股間を勃たせていた。

露骨に聳えるテントを慌ててバッグで隠す所も愛らしく感じる。

繋がった手のひらは、汗に塗れてベトベトが伝わってくる。

芳樹君か……何歳だろう？ 童顔で凄く可愛らしい。絶対に覚えておこう……

すると今度は左手も取られる。こちらも若々しいけど、見るのは初めてだ。

芳樹君とは違い、結構遊んでいそうな中性的な今風のイケメン男子だった。

テレビで通用するくらいの美男子だった。

「僕も初めてだから、よろしくおねがいします。紗友里さん。僕のことば楓って呼んでくれると嬉しいです」

「う、うん」

礼儀正しいけど、仄かに垣間見える「遊び」の気配……

この数年で多くの男性と接してきたから分かる。小動物のフリしてヤリチンだ。まあ、これくらい端麗だったら、年頃の女子も黙ってはいないだろう。

女子が寄ってくるなら、やっぱり食わずには居られないハズだ。

私も、こんな風になる前だったら、楓君の容姿にやられていたかもしれない。

「あっ……!？」

すると、不意に唇に柔らかい感触が伝わってきた。

楓君は、甘い顔してしっかりと相手の目を見るタイプらしい。

私が少し照れると、その隙に楓君が私の唇を奪ってきたのだ。

慣れたように身体を預けてきては、自らの舌を口の中へと押し込んでくる。

唾液が絡み付き、いやらしい臭いが鼻を突いた。

みんなが見てる前で平気でキスしてくるなんて……!!

しかも、今日が初めてって言った癖に、どんだけ積極的なものっ……!!

でも気持ち良い……

私は目を瞑り、繋がれた両手をギュツと握りしめた。

ちゅっ、ちゅくっ、ちゅっ……

周りから歓声が上がる。

そして直後に身体中から伝わる、小慣れた快感……

キスが火蓋を切り、周りで静観していた人達も、遂に動き始めたようだ。

私の胸や股間、腹部、脚、あらゆる箇所にも男達の手が伸びていた。

四 バスの中で乱交

「もう始まつちやったか。せめて最初はカラオケとかやりたかったんだけどね」
久志さんが呆れたような声を漏らす。

けど、その声もみんなの扇情的な歓声によってかき消されてしまう。

「紗友里さんの唇、柔らかいっ!! ずっとキスしていたいです!!」

「あっ、んっ、ふうっ……」

「紗友里ちゃん、もう濡れてるね」

「流石。準備万端って感じだな」

「じゃあ、俺も遠慮なく頂くとするかな。右胸、頂きまゝす!!」

「ぼ、僕は右胸を……」

「紗友里。またおっぱい大きくなってない? 凄い重量だな……」

「エッチする度に大きくなってるとよな」

「んじゃ、もっと大きくさせてあげようか」

「良いね。俺にも揉ませてくれよ!!」

「俺も!!」

「ひやあああんっ、い、いつも通りの展開だよお……!!」

思わず声が抑えられない。一瞬で身体が熱くなっていく。

全身が快楽を欲しようとして敏感になり、何処を触られても感じてしまう。

そんな中で、あちこちから伸びる触手……

いつも通り私は、全方位から伸びるみんなの手に埋もれていく。

私は、これが堪らなく好きだった。

たった一人の女を、こんな大人数が一斉に愛している。

その特異性が面白い。とにかく、幸せ過ぎて死んじやいそうだった。

「あっ、あああっ、あっ……!!」

「パンツの染み凄え……もうイツちやつたんじゃない？」

「確実にイツてるだろうな、この顔は」

「エロ過ぎだろ……俺も、もうイキたくて仕方ねえよ……」

「お、俺も。ちよつとオナニーすっかな……」

「僕も……」

私に感化された男の人達が静かに立ち上がると、すぐにズボンを脱ぎ始めた。

パンツも剥ぎ、ムワツと男臭が立ち込める。

見ると、どのペニスもギンギンになっており、苦しそうに打ち震えていた。

「ふあああつ、あつ、ああああつ……♡」

そして私を視ながら、みんなが自慰を始める。

何処を見ても屹立したペニスがあり、つい私の目がハートになる。

バスが発発して十分足らず、早速と私の理性は失われていた。

「ああああ……♡」

喉を絞られたような声が出る。みんなが私を視てオナニーしてる……

私をオカズにして……

溶けていく。思考も、身体も。口から勝手に涎が垂れていく……

脳みそがドロドロに蕩けるような感覚……

感無量だった。

「……………」

「……芳樹君もキスする？」

「えっ、いい、良いんですかっ？」

「勿論よ。良いよね、楓君？」

「う……はい……」

楓君とキスする間、反対側から延々と感じていた羨望の眼差し……
如何にも経験の浅い芳樹君の視線だった。

その視線があまりに単純で……つい私から声を掛けてしまう程である。楓君が一瞬苦い顔を浮かべたけど、すぐに頷いてくれたので芳樹君をキスに加えた。

寄り添う二人の間に舌を伸ばすと、吸い込まれるように左右から舌が伸びる。

「んっ、ふうっ、あっ、ふあああ……」

「紗友里さんっ、紗友里さんとキスしてる……俺のっ、ファーストキスっ!!」

「芳樹君っ、キスも初めてなんだ……私なんかが最初で……ごめんね?」

「い、いえっ、最高に嬉しいですっ、幸せ、です……」

「……紗友里さん。僕にもお願い……」

「う、うん。三人でキスしよう」

「んっ、ぢゆるっ、ぢゆくっ、んっ、ふあっ……」

ダブルキスに馳せる。

拙い動きの芳樹君と、慣れた動きの楓君。

どちらにも味があった。

また、下半身から強い快感が走り出す。

チラリと見ると、見覚えのある男の人がスカートに首を突っ込んでいた。

「久志、さんっ!？」

「紗友里ちゃん。バスに入って、いきなりエッチは無いでしよう。自己紹介とか、今日のスケジュールの発表とか色々段取りを考えていたのに……」

「あつ、ご、ごめんなさいっ……」

「まあ、どうせ無理だろうとは思っていたけどね」

「あ、あの、バスは何処に向かっているんですか？」

「それも知らないでバスに乗ってエッチしてるの？　紗友里ちゃん。少しくらい警戒心を持った方が良いんじゃないかなあ」

「あう……」

「信用してくれるのは嬉しいけどね。このバスは、僕が経営する旅館に向かってるんだよ。安心してくれ。貸し切りだから」

「ひ、久志さんの旅館っ!?　す、すごそう……」

「かなり大きいよ。そこで紗友里ちゃんはファンと週末を過ごしてもらおうのさ」

「ひええ、週末ずっと……貸し切りの旅館で……」

「全員入れるか不安だよ。かつてない人数での宿泊だからね」

「五十人くらいでしょうか……私も、体力が持つか分からないです……」

「え？　五十人？　いやいや……このバスだけじゃないからね？」

「えっ!？」

私の発言に、久志さんが顔を顰める。

と、続いて私は驚愕の事実を聞かされた。

「紗友里ちゃんの四十歳の記念すべきパーティーの参加者がたった五十人だけのハズが無いじゃないか。いつも関東圏のファンばかりじゃ不公平と思ってね……今回は、全国のファンが集まれるように各地でバスを手配して旅館に向かわせているんだよ」

「え、ええええっ!？」

「さつき参加者の集計が届いたけど……紗友里ちゃん。覚悟した方が良いよ」
「……………」

土曜日・日曜日は思う存分にファンと旅行……

という話で乗り込んだバスだけど、今回の参加者は全国各地から集まるといい、私の想像を遥かに超えた規模とのことだった。

私が関東圏に住んでいることから、確かにこれまで不平不満は多くあった。

関東のファンとはエッチしてるのに、関西のファンとは殆ど会えていない。

だから久志さんは、この機にわざわざ手配してくれたのだ。

もう間もなく目にする話……私は、あまりに覚悟が足りなかった。

五 既に逆ハーレム

どうやら、バスは単なる移動手段でしかなかった。

目的地では、過去にない規模でのお祝いが待っているらしい。

四十歳を記念して、久志さんが全国のファンクラブに声を掛けてくれたのだ。

「だから、せめて移動中は楽しくしようと思ってたんだよ。でも、こうなるのは分かり切ってたかな。じゃ、いまだ僕達だけで紗友里ちゃんを独占しちゃおう。という訳で頂きます!!」

「あつ、あああああつ!!」

地獄とも天国とも言える四十歳感謝祭……

その前哨戦が開かれた。

私のスカートに久志さんが首を突っ込み、既に染みを拵げたパンツを舐めだす。真っ暗なスカートの中でも的確に急所を捉えており、とうに官能中枢が犯された私は、それだけで狂楽のドツボに叩き落される。

「あつ、や、やっぱり久志さんっ、上手っ……!!」

ギシギシと補助席が揺れる。身体の震えが止まらなかつた。

また、その間も左右から芳樹君、楓君の舌戦が続く。

二人も、今回の件についてあまり詳しく知らなかつたのだろう。楓君が面白くなさそうな声で嘆いていた。

さつきまでの礼儀正しそうな様相から一変した、なんとも不機嫌な声色である。

「まだ男いっぱい来んの？ んだよ……冗談じゃねえよ……」

「仕方ないよ。紗友里さん、何万人ってファンが居るんだから……」

反対側で芳樹君が宥めていた。私も、楓君を宥めた。

「ごめんね、私もビックリだよ……五十人でも多いのに……」

「あーあ、今回の旅行で紗友里さんをモノにしたかったのに」

「モノに、って……？」

聞くと、楓君が盛大な溜息を吐いて言った。

「鈍いなあ。俺ね、本気で紗友里ちゃん狙ってたんだよ。結婚とかマジで考えて。

今回だけで俺に惚れさせられっかなあ、とか考えてさ」

「ええ、嘘でしょ!？」

「紗友里ちゃん。もう少し自分がモテる存在だって自覚した方が良いよ」

周りの男の人達も一斉に頷く。

それはまあ、この数年間でだいぶ自覚するようにはなったけど……
どうやら私には、人知を越えた魔力みたいなものがあるのだ。

私に関わった男は、全員必ず私に依存してしまうような、極致的な呪いが……
じゃないと、説明が付かない。

だってファンクラブの中には、お金持ちやイケメンさんも沢山いるのだから。
どんな女性でも選び放題な男が、私だけに何年も依存している……

「モテる」という単語では納得が行かない。

だから私は、この異様な逆ハーレムの現象を「呪い」と呼んでいた。

呪いは呪いでも、私を幸せに狂わせる呪い……

あまりハッキリとは追及せず、頭にチラついたら性に溺れて曖昧にする……
その繰り返しだった。

「ぼ、僕も……」

「え？」

と、今度は芳樹君が声を張り出す。芳樹君も、呪いに掛かっているようだ。
とろんとした瞳で私を見つめている。握った手に、更にギュッと力が籠る。
露骨に盛り上がった股間を隠そうともせず、私を一直線に見つめて言った。

「僕も結婚したいです!! 紗友里ちゃんと結婚したいです!!」

「えええっ……!!」

「こんなに可愛くて綺麗でエッチが好きなのなんて居ないよ。ずっと好きでした。ずっと結婚したいって思っていましたっ!!」

顔を真っ赤にしては、目も涙で潤おんでいる。握った手は、小さく震えていた。間違はなく一世一代の告白だった。

こんな私の呪いの所為で決死のプロポーズを……ごめんなさい。芳樹君。

ごめんなさいと謝りつつも、ちゃっかり私の下半身は濡れている。

ダメだなあ……と思ながらも、今日も呪いに浸かって幸せに溺れていた。

呪いが連鎖するように、楓君も言葉を紡ぐ。

「好きだよ、紗友里さん……」

「好きです。紗友里ちゃんっ……」

「あああああっ……そんなこと耳元で言われたら……脳が……溶けちゃう……」

初対面の男子二人からのプロポーズだった。

私の年齢の半分くらいの若さでありながら、今日初めて会う私にプロポーズだ。プロポーズしては、無我夢中に私の唇を貪っている。

周りの人達も馬鹿にしたりせず、懸命に私を目掛けてペニスを抜きあげていた。

これが呪いでは無くて、なにが呪いなのか……

幸福感が溢れて止まず、それが形となってアソコから滴って仕方がない。滴る愛液を久志さんが全て受け止める……

そんな恍惚に悶える私をオカズに、周りの男性陣が想いを奔らせている……バスの中は、限りなく愛で溢れていた。

「はあ、はあ、はあ……」

「またイツちやったんだね。紗友里ちゃん？」

「は、はい……」

「でも、やっぱりイツた顔が最高だね、紗友里ちゃん。マジで好きだよ」

「あ、ありがとうございます」

「俺も好きだ」

「僕も……」

「好きです」

「好きだ……」

呪いの濃度がどんどん高まっていく。

芳樹君、楓君、久志さんだけでなく、その場に居た全ての男性陣も、なにかに憑りつかれたように、目を蕩けさせて私に愛を叫んでいる。

告白しながら、己の肉棒を高速で貪っていた。

みんな爆発寸前らしい。

私に浴びせたいのか、全員が身を乗り出して距離を詰めていた。

真っ赤に腫れあがった亀頭が、視界一杯に映し出される。

この瞬間も大好きだった。

「紗友里ちゃんっ、う、受け取ってくれっ!!」

「はい♥ 皆さんの……私の全身に浴びせて下さい♥」

「ああああっ、あああああ~~~~っ!!」

ドピュルルルッ、ビュルルルルルルルッ!!

熱気が最高潮に達して、一瞬で静まり返る至高の時間……

五十もの亀頭から放たれたソレは、見事に私を白濁へと染めたのだった。